設楽発掘通信

No.82
令和５年
10月号

下延坂遺跡の調査を行なっています

今年の夏は本当に暑かったです。九月になっても暑さはおさまらず、中旬でも最高気温が三十五度を超えて、統計開始以来のもっとも遅い猛暑日を記録したようです。残暑がいつまで続くのか心配しましたが、十月も半ば、さすがに秋も深まり肌寒さを感じる季節となりました。

さて、七月から九月上旬まで調査をしておりました万瀬遺跡の発掘調査が終わり、現在、下延坂遺跡の発掘調査を進めています。これまでに調査が終了した上ヲロウ・下ヲロウ遺跡、万瀬遺跡と同様に、道路の真下を調査します。町道七九号川向境川線上の南北方向に長さ四百メートルほどの調査区が設定されています。設楽町役場から、国道二五七号および県道十号を北に進むこと二キロメートル、境川を挟んだ対岸に下延坂遺跡の調査区が見えてまいります。現在までに土坑やピットなどの遺構や縄文時代・弥生時代の遺物が確認されています。令和二（二〇二〇）年から発掘調査を続けています下延坂遺跡の詳細については本紙三ページ下段にて解説させていただいております。

下延坂遺跡の発掘調査は十月末ごろに終わる予定です。下延坂遺跡の終了後は、根道外遺跡へと調査が続きます。これからは日ごとに秋が深まってまいります。どうぞお健やかにお過ごしくださいませ。

（鬼頭　剛）

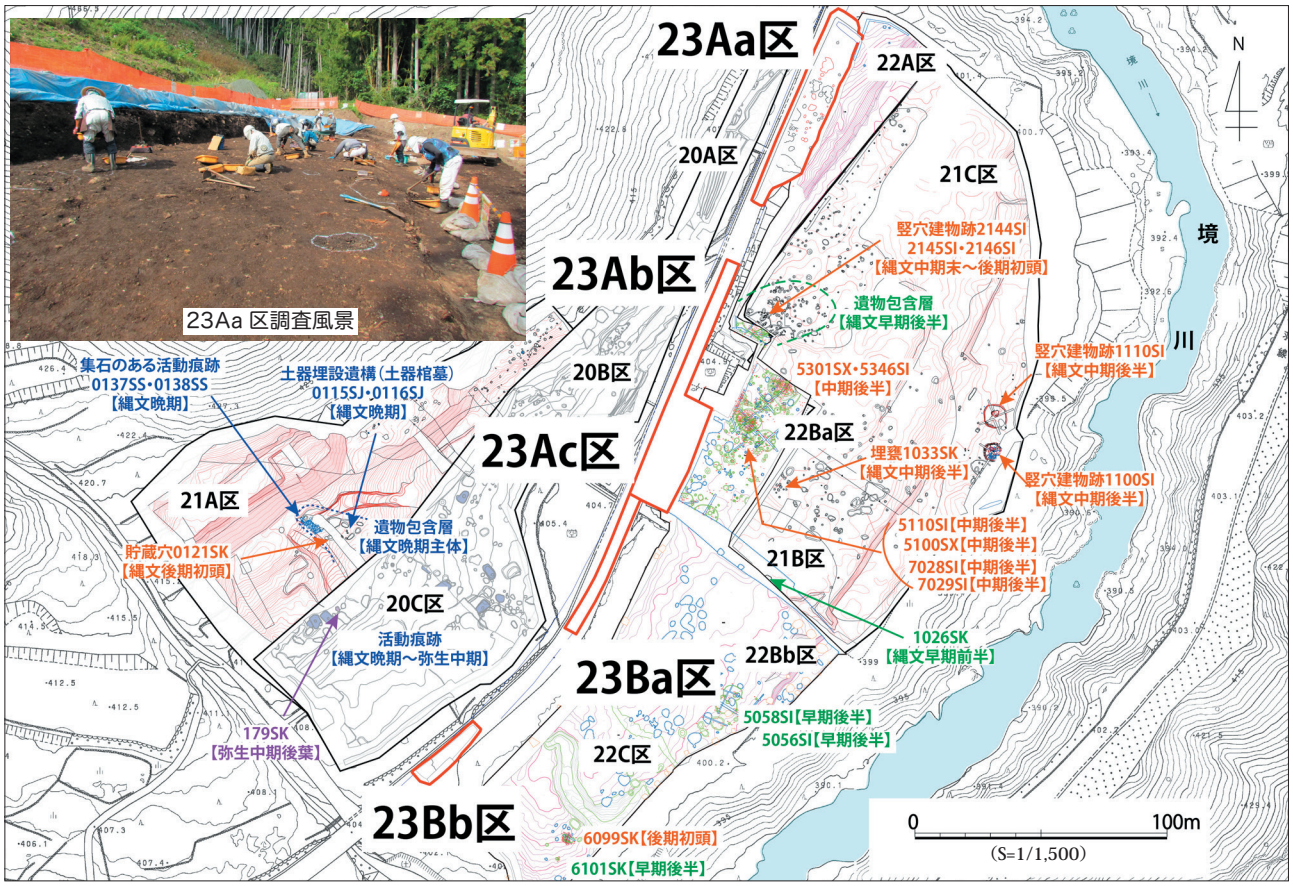

図１　下延坂遺跡全体図（赤太線が今年度調査区位置）

万瀬遺跡の発掘調査

七月の中旬から始まりました万瀬遺跡の発掘調査が無事終了しました。ここでは今年度の調査結果の概要についてご報告します。前号（設楽発掘通信№81）では中世から近世の遺構群が展開する上一面の調査途中の状況についてご報告しました。

その後の調査で墓坑（３１１５ＳＺ）が新たに一基見つかりました（図2）。この墓坑は調査区の東端に位置しており、墓坑内には人骨、煙管、鉄製品、陶製品の鬢盥が見つかりました。鬢盥とは髪を整える際に使われた鬢水（整髪料）を入れる道具の事です。鬢盥ににについては万瀬遺跡の東側に位置する上ヲロウ・下ヲロウ遺跡でも墓坑内から見つかっており、設楽発掘通信№80でご報告しております。人骨に関しては脆弱な状態でしたが四肢骨と思われる形状の物が一部確認されました。埋葬方法は骨に焼けた痕跡が見当たらなかったことから土葬であったということがわかりました。

また、前号でもご報告しました調査区西端に位置する墓坑（３０１８ＳＺ）でも、人骨や歯が見つかっています。状態は脆弱ですが、頭蓋骨の形状が認識できる程度に残っていたため、形状を壊さないよう慎重に掘削を進めました（図3）。こちらの人骨も状態からみて埋葬方法は土葬であったことがわかりました。また、以前にご紹介しました墓坑内の小玉は最終的に80個以上確認され、大きさや素材が異なるものも見つかりました（図4）。素材については今後、自然科学分析によって明らかになるかと思われます。

図４　墓坑 (3018SZ) から出土した小玉

図３　墓坑内の掘削の様子 (3018SZ)

図２　墓坑内の状況 (3115SZ)

次に、下面の調査結果についてご報告します。下面には縄文時代早期（今から約一万年前頃）の重要な遺構や遺物が見つかりました。２０１９年度に実施した万瀬遺跡の発掘調査では19Ｃ区で竪穴建物跡が計５基重複した状態で確認されております。19Ｃ区で見つかった竪穴建物跡は今年度の調査区との境に位置しており、２０１９年度の調査ではその全容を明らかにすることができませんでした。しかし、今回の調査では４基の重複している竪穴建物跡を確認することができ、その全容を明らかにすることができました（図5）。また、これとは別に１棟、竪穴建物跡が見つかっており、このあたりで当時の人々が居住していたことがわかりました（図6）。

今回の調査区では煙道付炉穴も見つかっております（図7）。炉穴には押型文土器や撚糸文土器の土器片、石器が確認されております。炉穴内を掘削していくと底部の土が二層になっていました。これは異なる時期に何度も使用していたことでこのように土が堆積したと思われます。

また今回、煙道付炉穴から出土した土器片には煤が付着していました。煤は自然科学分析によって年代を測定することができる貴重な試料となります。今後は年代測定によって炉穴の使用時期を明らかにできたらと思います。

（荒木徳人）

図７　煙道付炉穴と土器の出土状況

図５　重複した竪穴建物跡

図６　１棟検出した竪穴建物跡

煙道付炉穴について

炉穴と呼ばれる遺構は、縄文時代草創期末から早期にかけて、しばしば見つかる遺構です。深い土坑を掘って、その隣接した場所にさらに斜めからやや小型の坑を掘ってトンネル状につなげたものが代表的で、このような炉穴は煙道付炉穴（もしくは連結土坑）と呼ばれています。この遺構は、やや傾斜のある場所に設けられることが多く、大きい坑が火床で、やや小さい坑から煙を出す構造であったと考えられています（図8・9）。

今回の万瀬遺跡の調査事例のように、修繕などをしながら何度も使用する場合が多い一方、群のように見つかる場合もあります。万瀬遺跡では本例で四基目、大栗遺跡では四基みつかっていますが、近隣の遺跡で見ると、豊田市の水入遺跡で二十基ほど、豊橋市の眼鏡下池北遺跡で四十基ほど、静岡県浜北市の中通遺跡や三重県四日市市の中野山遺跡では百基以上がまとまって見つかっています。

炉穴は竪穴建物の外に設けられる屋外炉でした。肉や魚などの食糧を燻製にするためのものとか、小さい坑の方に尖底土器を据えて煮炊きするために使用したなどの説が考えられています。いずれにしても、当時の食糧調理に必要な施設であったといえましょう。（川添和暁）

図８　万瀬遺跡 19A 区で調査された煙道付炉穴

図９　大栗遺跡の煙道付炉穴（上）とその模式図（下）

下延坂遺跡の発掘調査

今年度の下延坂遺跡は、町道部分の調査を実施しています。遺跡の状況と調査の都合上、Aa区・Ab区・Ac区・Ba区・Bb区の五調査区に分けて実施しています（一頁の図1）。これまでに、Aa区・Ab区・Ba区・Bb区の調査が完了しました。

Aa区では、図10のように大きく四層の堆積を確認しています。耕作土は近世以降のものと考えられますが、細片化した弥生土器片や剝片などの石器が出土しました。その下層には土石流などの堆積層が最大一メートルもの厚さで堆積していました。この層にけ削られたためか、地山の上面では、遺構・遺物は確認できませんでした。Ab区では道路造成土の下から近世以降の耕作土の堆積を確認しています。その下2メートルほど下で地山に達しますが、その上に堆積した黒色土からは石器（剝片）が出土しました。21Ｃ区で確認された縄文時代早期後半の包含層に相当すると考えられます。Ba区・Bb区でも道路造成土の下から近世以降の耕作土が確認され、Ba区では細片化された縄文土器片や剝片などの石器がまとまって出土しました。その下は斜面上方からの沢の堆積が累重していました（図11）。

現在、最も保存状況の良好なAc区の調査を実施しています。その成果については、次号でご紹介致します。（川添和暁）

図 10　下延坂遺跡 23Aa 区北壁土層断面

図 11　下延坂遺跡 23Bb 区全景（北東より）

出土銅製品の保存について

鉄や銅などの金属は水や酸素により錆が発生します。出土金属製品も同様に土の中で錆が徐々に進行し、発掘されてから空気に触れることで錆の進行速度が加速していきます。そのままの状態で、放置すると錆の進行によって現在の形状を維持できなくなり、遺物が持つ情報も失われてしまいます。そのため、このような考古資料を後世に残すためには適切な保存をおこなう必要があります。

今年度の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査では近世の墓坑（６００６ＳＺ）から銅鏡が出土しました。ここでは、この銅鏡の取り上げ作業から保存処理前の事前調査についてお話していきます。今回の調査区は山からの水が流れ込みやすい立地であったため、墓坑内の土はかなり水を含んだ状態でした。そのため、すぐに記録をおこない、遺物を取り上げる必要がありました。この銅鏡は厚さが薄く、そのまま取り上げると割れてしまう恐れがありました。そこで、今回は土ごと取り上げて室内で土を除去していく方針で作業を進めました。

土には水分が多く含まれていたため、早急に土を除去する作業に取り掛かりました。土を除去していく過程で鏡に繊維が付着していることが判明しました（図12）。この繊維も重要な考古資料となります。そのため、慎重に土を除去しながら鏡と繊維を分離させると、鏡には紋様が刻まれてることが分かりました（図13）。しかし、表面にはまだ土も残っており、紋様が綺麗に見えません。

銅製品の保存はこれらの土を除去し、錆がこれ以上進行しないよう薬品による安定化処理をし、合成樹脂を含浸させて強化していく事が最終的なゴールとなります。このような遺物の表面に付着した土を除去するには顕微鏡で見ながら筆や竹串などを用いて慎重に除去していかなければなりませんが、土の下に隠れた紋様の位置や鏡内部のひび割れなどの損傷状態を除去する前に把握しておく必要があります。そこで、鏡のＸ線写真を撮影し、土で覆われた紋様や内部状態を確認しました。その結果、小さなひび割れを確認する事をできましたが、全体的に目立った損傷はありませんでした（図14）。また、土に覆われている箇所もしっかりと紋様が残っており、鏡の左端には藤原という文字も確認できました。江戸時代の鏡には藤原と刻まれたものがいくつか確認されており、鏡師であったことがわかっております。藤原の下には名前と思われる文字も刻まれていますが、土が厚く覆っているためクリーニングしなければ分かりません。名前がわかると鏡の制作時期から墓坑の年代を推定できるかもしれません。今後は無事に保存処理を完了させ、良い状態で皆さまにお見せできたらと思います。

（荒木 徳人）

図12　鏡に付着した繊維

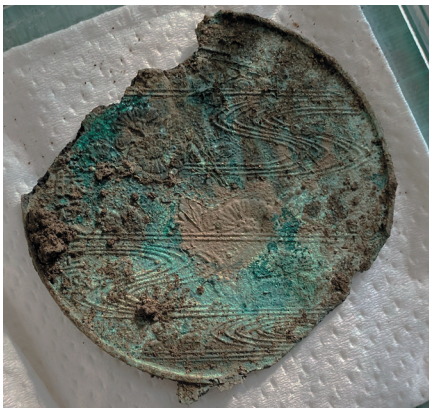
図13　鏡の表面状態

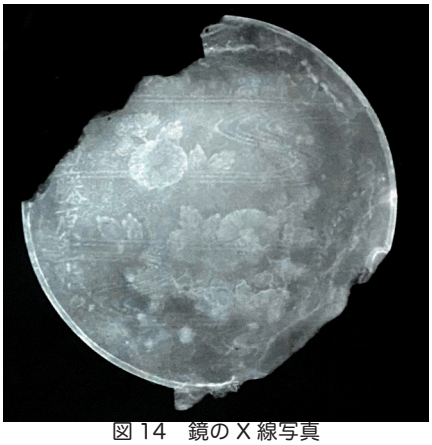
図14　鏡のＸ線写真

設楽発掘通信
No.82
令和５年10月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力 株式会社 二友組
あいち埋文